

財団法人 黛民族舞踊文化財団



目 次

- 舞踊文化について……………1 黛 節子
- ライスロード
 - 古代赤米のねがい……………2 安本義正
 - 倭族の詩歌、音楽、舞踏について…3～4 岩 宰
- 韓国の伝統楽器大箏を考える ……5 草野妙子
- 素晴らしい舞台創りの為に……………6 沢田祐二
- ゆけなかった節まつり……………7 黛 節子

舞踊文化について

黛 節子

民族舞踊の底辺を支えるもの。即ち舞踊文化というものがあるとすれば、一体それはどのようなものなのだろうか。

「舞踊文化ETC」はこうした疑問を一つ一つ解明してゆく為の新しい試みである。

舞踊を習い始めた当初は、それを日本舞踊とよぶことに何の疑問も反発も感じなかった。その上、まさか踊りに一生を費やすことになるだろうなどとは夢にも思わなかった。唯、踊ることが好きで好きで、踊ってさえいれば充分満足、嬉しく楽しいことだった。ところが次第に深入りするにつれ、又知恵がつくにつれ数々の疑問が湧いてきた。

それは踊り込む程に、のめり込む程に益々大きくふくれ上がってきた。つまり発散度の低さに到頭我慢しきれなくなってきたということであった。勿論内に秘める表現様式も、表現手段としては大切なことなのだが、踊り本来の持つべき生命力ということを考えるとそれでいい筈がないという思いにかられ、激しいジレンマに陥った。

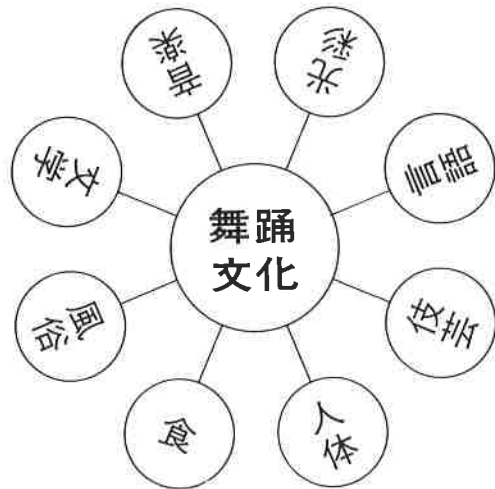
内に秘める発散度の低い表現様式をよしとする美意識。それは世阿弥の残したかの有名な花傳書の一節「秘すれば花」の言葉にも要約されているように思う。

では何故そうなったのだろうか。島国特有の湿気の強さが、民族の性格的な資質までそのように形づくってしまったのではないだろうか。芸が枯淡になったとか、枯れてきたということが評価され、生きた人間が生きた感性を発散させて表現することは、とかく疎まれる傾向が強いなかで、私はどうしても生きた踊りが踊りたかった。民族舞踊はそうした私の気持ちを受け止めてくれるジャンルの踊りでもあった。北から南まで弓形をなすこの日本の国には、数々の形式の舞、振りがある。これ等の踊りを総合してこそ真の日本舞踊と言えるのではないだろうか。

歌舞伎芝居から派生し、江戸庶民の芸事として発展した舞踊のみを、日本舞踊と総称することはいささか抵抗を感じるのは、そうした思いがあったからでもある。諸国に残る民俗芸能を勉強するに及び、その感益は益々高まってくる。

北から南まで無数に散らばる民族芸能を解きほぐし、或いは復元することにより、真の日本民族の舞踊ともいふべきものが確立されるのではないだろうか。

民族舞踊はそれぞれの民族が生きる為に作られた祈りと言える。舞踊する人間の中に、祈りが燃える時にこそ、その祈りは人々の心に通じ、生きることへのエネルギーを呼び覚ますのだと信じている。そして、舞踊文化とは、各ジャンルで作りあげる円形の中心に位置する総合文化であると私は改めて発想し信じている。



ライスロードの風・光・土・人々

A 古代赤米のねがい

京都文教短期大学助教授

工学博士 安本義正



日本の米のルーツと言われ、赤飯のルーツとも言われる古代赤米が現代によみがえりました。明治に入ってから、ほとんど姿を消していた赤米ですが、日本国内三箇所の神社で神事用に受け継がれていたことと、平城京跡で出土した多くの木簡の中に、「赤米」と記載されたものがあったことから、日本民族の夢をのせて、今よみがえったのです。

米の自由化問題あるいは自由米の問題で日本列島が揺れ動いている今日、この赤米がよみがえったことに深い意義を感じています。この赤米が私達に何か大切なことを語りかけてくれているように思います。古代人の心が、そして願いがこめられているように思います。

著しく科学技術が進歩した現代社会にあって、ともすれば「物の豊かさ」の陰に忘れられがちな「心の豊かさ」をとりもどしてほしいとのねがいを、私達に語りかけているのではないのでしょうか。

私も日本民族の心のふるさとを夢みて、今年も赤米とともに歩みました。赤米と共に生活して、私の心の中に感じたままの気持ちを言葉に託してみました。

まっすぐに
空に向ってのびている稲穂に
いのち
生命の力強さを感じる。

さりげなく
左右に首をかしげている稲穂に
いのち
生命の優しさを感じる。

ゆったりと
地面に向ってたれている稲穂に
いのち
生命の豊かさを感じる。



赤米の稲穂

赤米は、人が人として生きる原点を教えてくれているように思います。

本当に力強く生きるということはどういうことなのか、本当に優しく生きるということはどういうことなのか、そして本当に心豊かに生きるということはどういうことなのか……。

古代赤米のねがいが聞こえてくるようです。

B 傣族の詩歌、音楽、舞踏について

中国、雲南省思茅地区民族歌舞団

団長 岩 宰^{あい さい}

前 言

尊敬する黛民族舞踊文化財団理事長黛節子先生、並びに今日御来場の皆様！

先ず、私が中国・雲南の文化界から来日した一人としてごあいさつ申し上げます。黛節子先生の御厚情にあふれた招待により、私は日本に来ることができました。傣人の深情をたずさえて、この美しい桜の国、雄大な富士山の下、友好的な日本の人々の中で、技芸を磨き、共に友情を語ることができるのです。

ここで私が「孔雀の里」の住人を代表して、尊敬する黛節子先生に心からの感謝の意を表することを^(傣人の村里)お許し下さい。

中日両国の人民は皆平和を熱愛し、友情を大切にします。大和民族と炎黄の子孫は自らの知恵で世界に名だたる文化芸術を創造しました。この芸術の花をもっと鮮やかに、^(中国民族)はなやかに開かせるため、中日両国の文化交流を進めることはぜひとも必要であります。私は一人の平和の使者として微力ながら両国の文化交流のお役に立ちたいと願っています。そこでこの機会をお借りして傣族の詩歌、音楽及び舞踊の状況を皆様に簡単に紹介し、あわせて皆様の御質問をよろこんでお受けしたいと思います。

概 況

傣族は雲南省に分布し、1982年7月1日現在で人口は83万6千人余り、主に雲南省南部の西双版纳傣族自治州、西部の德宏傣族景頗族自治州及び西南部の耿馬、孟連両県に居住しています。この外に雲南省内の景谷、景東、普洱、瀾滄、鳳慶、雲県、臨滄、双江、新平、元江、金平、元陽等三十余県市及び金沙江、南盤江沿岸の谷あいの盆地に散在または他民族と混在しています。

傣族の言語は漢藏語系壮侗語族壮傣語支に属します。そのうち主要なものは三つの方言即ち西双版纳地区の傣泐（ルー）語、德宏地区の傣那（ナー）語及び孟連等の地区の傣仂（ボン）語にまとめられます。傣泐と傣那は文字を持ち、おそらくはインドのパーリ文が変化し、伝えられたとされています。

傣族地区は山や川が美しく資源は豊富、至る所人を魅了する美しい亜熱帯の景観が見られます。うっそうとして天までとどく原始林が広がり、山間には多種多様な薬草や珍しい鳥獣が生育し、「動物王国」の名をほしいままにしています。

傣族地区は熱帯、亜熱帯型の気候に属し、年平均気温は摂氏21度前後、一年中雪は降らず、霜の時期は短く、多雨多湿であります。年間を通じて四季の区別はなく、乾期と雨季だけがはっきりと分かれています。大部分の傣族地区では稲作が盛んで、そのうちの多くは二期作、三期作です。内外に名を馳せた普洱茶は西双版纳で生産されています。傣族地区は河川が縦横に流れ、主要河川の怒江、瀾滄江、把辺江等は巨大な水力資源を内蔵しています。

傣族は主として小乗仏教を深く信じています。傣族の家庭の基本形態は一夫一婦制の父権制小家庭です。傣族の年は陽暦年、つまり地球が太陽を一周する公転時間と同じです。これに対し傣族の月は陰暦月で、月の満ち欠けを一周期とします。傣暦は1年が12ヶ月単月（奇数月）とは大月で30日、双月（偶数月）は小月のことで29日あります。19年の間に閏の年が7回あり、3年に1度9月が閏月になります。1年は3期に分かれ、5月から8月までが熱季、9月から12月までが雨季、1月から4月までを冬季としています。

傣族の男性の服装は衿の無いつめえりまたは大襟の小袖の短い上着に、下は細身の長ズボンをはき、白布か水紅または紺木綿の布で頭を包みます。男性が交身（いれずみ）する習俗

はかつては広汎に見られました。女性の服装は地域によって異なります。西双版纳では女性は上に白か緋色または空色のしまった着物をつけ、大襟かつめえりの体にぴったり合うブラウスを着て、下は花色の長い巻きスカートををはきます。髪は頭上で結び上げ、櫛をさすか花をかざします。主食は米で、徳宏ではうるち米を西双版纳ではもち米を食べます。酸味のあ
るもの、火であぶった水産物、生野菜などを好みます。酒をたしなみ、檳榔(びんろう)をよくかみます。金齒、銀齒を嵌(は)めるのを好みます。かつては女性は齒を黒く染めていました。唐代の漢文史籍の中では傣族のことを「金齒、銀齒、黒齒。」とよんでいます。各戸ごとに竹楼(竹製の高床式住居^(漢書卷1))があり、竹の垣根をめぐらし、果樹はたれさがって自然に中庭をかたちづくりま
す。竹楼は上下両層に分かれていて上には人が住み、下では家畜や家禽を飼ひ、農機具等を置きます。竹楼にのぼると外側には廊下、露台があります。室内は2つに分かれ、奥は寝室、手前は客室と台所を兼ねています。火をおこして米飯を炊きます。

傣族は主として土葬ですが、事故死、急病死、難産死等の正常でない死または小児の死亡は水葬にします。僧侶等は棺に入れ火葬、その後に骨灰を罐に入れて寺の裏に埋葬します。広汎な影響力をもつ高僧が病死したときは仏教の規定に基づいて建てられた仏塔に遺骨を安置して、この高僧を永久に記念します。

家に入る前には皆くつを脱ぎます。客人はいろりの上席に座ったり、いろりをまたいだりはできません。また主人の内室に入ったり門口のしきいに座ったりしてもいけません。

傣族の重要な祭りに水かけ祭りと閏門節、開門節があり、これらはいずれも小乗仏教の宗教的な行事です。閏門節は傣暦の9月15日、開門節は傣暦の12月15日に行います。閏門節から開門節までの3ヶ月間は年間を通じて最大の喜捨の時期で、節日には盛大な「賤仏」^(仏主や僧に捧げ物をする)の行事や荘厳な仏教式典が挙行され仏のために食物、経典、鮮花、衣服、銀貨等が奉納されます。水かけ祭りは傣族人民が新年を迎えるための伝統行事で、仏教暦では6月、西暦では4月中旬に行なわれます。

傣族の文学、芸術は豊富で多彩であり、これらは傣族人民が長年にわたって刻苦して創造してきたものです。同時にこれらの作品は思想や題材、芸術の気品等の点において小乗仏教の影響を深く受けています。文学の主要な形式は詩で、特に叙事詩は十分に発達しています。この他に多くの古代からの伝説、人の心を動かす優美な恋歌のかけ合い、独特の風格のある傣劇や舞劇などがあります。また傣族には民間に流布された大量の寓話、童話、笑い話、ことわざ、なぞなぞ等の口誦文学があります。

傣族は歌舞をよくし、誰でも音楽を愛好します。舞踊の形象は生き生きとして感情細やかであり動作は動物の動きを模倣し、美化しています。それは例えばたいへん流行した「孔雀舞」「象脚鼓舞」及びその他の舞踊に見られます。音楽は主に詩歌と一体化した「章哈」調や民間歌謡等です。舞踊の伴奏にはたいへん象脚鼓が使われ、その他にも多くの民間楽器があります。このほかに彫刻や絵画に特有の芸術形式があり、多くは建築や装飾に使用されます。仏塔や仏寺建築は雄大壮観で精緻を極め、奥ゆかしいものです。訳・黛民族舞踊文化財団中国担当藤原明人
去る1988年6月黛民族舞踊文化財団の招聘により来日せる岩幸氏が当財団のために特別に寄稿されたものであり内容は傣族である岩幸氏が舞踊文化を中心に傣族の風俗習慣等を詳細にわたり記録したものである。その量は膨大であるので各号にわたり掲載の予定である。



「傣族民間傳説」より
孔雀と傣族の少女

韓国の伝統楽器大笏を考える

桐朋学園大学講師(民族音楽家) 草野 妙子

東アジアの音楽交流の歴史から考えて見ますと、日本が最初に受容した外国音楽は高句麗、百済、新羅などの音楽でした。その後今日まで多くの国々の音楽文化の影響を受けていますが、日本の伝統音楽の特質を良く知るためには、最も古くから交流を持ち、地理的にも近い民族の伝統音楽の実体と楽器の形態や演奏法を通時的にも共時的にも検証することが必要なのではないのでしょうか。そこで、今回は、韓国の伝統楽器のなかでも日本と特に異なる特徴を持っている楽器大笏（テグム）を考えて見たいと思います。



大笏の演奏

大笏はチョッテとも呼んでいます。横笛にもかかわらず、吹き口の向こう側のエッジに吹きつけて音を出すため、どこか日本の尺八に似た音をもっています。歴史的に見ますと、大笏は大きさの異なる中笏や小笏と共に新羅の三竹と呼ばれ、三国史記（朝鮮古代の新羅・高句麗・百済三国に関する歴史書）の樂志にも記録されています。その起原は定かではありませんが、古記に興味深い

大笏はチョッテとも呼んでいます。横笛にもかかわらず、吹き口の向こう側のエッジに吹きつけて音を出すため、どこか日本の尺八に似た音をもっています。歴史的に見ますと、大笏は大きさの異なる中笏や小笏と共に新羅の三竹と呼ばれ、三国史記（朝鮮古代の新羅・高句麗・百済三国に関する歴史書）の樂志にも記録されています。その起原は定かではありませんが、古記に興味深い

伝説があります。「神文王（681～692）の時に、東海（日本海の朝鮮半島周辺）地方に亀の頭のような形をした小さい山があり、その上に一本の竹が生えていたのです。その竹は昼間は二本に分かれ、夜は一本になってしまうという竹でした。その竹で王は笛を作らせて「萬波息笛」と名付けた」とあります。しかし、この伝説は楽器の起原として信頼できる話ではありませんが、朝鮮民族の宇宙観や物の考え方のある一面が表われています。重要な楽器や舞踊の起原にはいずれも神話的な説話があり王が造らせたことになっています。そればかりか、自然環境と楽器の関係も重要です。本来、朝鮮半島には竹やささ竹が少なく、日本や東南アジアのような竹の文化圏から離れています。そのため、竹に対する一種の思い入れが感じられます。実際に大笏を作るために使用される竹は朝鮮半島の一部の地域でしか生えていない双骨竹と呼ぶ竹で、中は樹木のように空洞になっていない竹です。また、普通の竹のように、節ごとに交互に葉が出ているものではなく、どの節からも両側から葉が出ているもので、その幹は太く多少平らな形で、切り口がやや楕円形の管です。それは吹奏の時、中の空気柱の振動が独特の音色を醸し出す効果を出すのです。現在、大笏には正樂用（雅樂などの宮廷音楽）とシナウィ用（民俗音楽や巫楽）と現代音楽用の3種があります。それは音域が異なるだけで、基本的な吹奏法は同一です。楽器の先端を左肩に載せて構え、吹き口の向こう側のエッジに空気を吹き付けながら、空気圧を変えたり、吹き口の角度を変えて音程を微妙に変化させます。そして、頭を上下に動かすことによって、幅の広いビブラート音や装飾音が出せます。指孔は6孔ですが、吹き口と第一指孔の間に穴があり、この穴に葦の茎の内側の薄い膜が張ってあり、この膜の振動によって、さらに独特の音色が得られるのです。その葦は特に川と海の間接地帯に生えている葦を五月上旬に採ったものでないと演奏の振動に堪えることができないといわれています。音律を調節するために、さらに2個の七星孔と呼ぶ穴もあります。このように、単なる横笛でも周辺の民族にはない固有の音楽表現のための創意工夫が見られます。

素晴らしい舞台創りの為に



〈舞台照明家〉 沢田祐二

日本大学芸術学部卒業と同時に劇団四季に入団。浅利慶太、金森馨、吉井澄雄に師事。1969年文化庁芸術家海外派遣研修生として1年間、ベルリンドイツオペラ、ロイヤルシェイクスピアカンパニーで学ぶ。現在は日本を代表する照明家として、劇団四季の公演を中心に、オペラ、バレエ、各種イベントで活躍。

主な作品 「シーザス・クライストス・パースター」「エクウス」「ジーク・フリード」「椿姫」「夕鶴」「ベニスの商人」「コーラス・ライン」「キャッツ」「アニー」「ピック・リバー」「ピーターパン」他

照明の仕事の基本は、まず劇場人であれ、と云う事です。(これは照明に限らないが)そして劇場は共同作業の場です。だから自分の立場を良く理解する事です。各ジャンルの人達が集まって1本の作品を創って行く訳だから、まず自分の仕事を完璧にする事です。

作品には必ず1本の“芯”が通っています。作家が提出した主題を1本の芯として演出家を中心に多くの人達が集って来ます。そして作品の責任は演出家にあります。私達もその作品に名を連ねたら、もうその演出家と心中覚悟で仕事に入ります。だから演出家の一挙手一投足もおろそかに出来ません。役者に出す駄目出しも、一言も聞きもらさない様に耳をそばだてます。そして自分の発想の糧にします。作品創りの全ては稽古場からです。稽古場で流す汗と涙の量が多い程、感動的な舞台が創りあげられます。照明家は稽古を見ながら、作品のもつ主題を正しく読取り、そこから明確で緻密なイメージをつくりあげ舞台で表現する事です。自分の目で確かめ、自分の肌で感じた劇的リアリティのみをイメージして行く事だと思います。しかし大きくふくれ上ったイメージも実際には劇場の照明設備、舞台稽古の時間、経費等数々の制約を受けるのが現実です。特に舞台稽古の時間の使い方は、我々照明家の仕事の死命を制しかねません。稽古場でつくりあげたイメージを具体化するのには、僅かな時間だけです。特に現在の日本では照明合せの為の時間を充分に取る事は不可能に近い事です。だから照明家の一番の条件は、限られた時間の中で、いかにスピーディに最大限の効果があげられるか、と云う事になって来ます。ある仕事でそれこそ僅かな照明合せの時に、バレエのアンサンブルが揃わないから、舞台を使わせて下さいと来た。さすがに私もムッと来て、貴方達は1ヶ月も前から稽古してるのに、照明は僅か2時間しか無いんだ。そんな事は稽古場でキチッとやって来たらどうです、と言ってしまった。それにしても我が国の舞台稽古の時間は全く貧しい。(これは稽古時間に限らず製作態勢全体に言えるが)お客様は劇場に現実生活を忘れ、劇場的な楽しさの中に夢を求めている訳で、今のまゝでは夢は遠のくばかりです。楽しい、素晴らしい舞台を創る為には、良い“台本”に出会えて、見せ方を知る演出家にめぐり逢い、鍛え抜かれた、俳優、ダンサー、歌手達と、劇場の舞台裏で働く事に誇りを持つ裏方達そして舞台を愛するプロデューサーが、一つになった時だと思います。

ゆけなかった節まつり

黛 節子

私は何年も前から沖縄、八重山の離島に心ひかれている。石垣島、宮古島、久高、久米そして種取りの竹富島等。何れも踊りの為の旅であった。石垣島には請盛ハツ子さん（通称ハッチャン）とよぶ無二の踊り馬鹿の親友がいて機会ある毎に交流を深めている。

それ程縁の深い沖縄、八重山なのに、未だ一步も足を踏み入れていない島がある。中で



西表山猫

も特に私が関心を抱いている島に西表島がある。西表と書いてイリオモテとよぶのも面白い。「入り（西）の大将、上がり（東）の大将………」と歌う黒島口説にもあるように西と東を太陽の出入りで表現する素朴さが、私にはたまらない魅力としてうつる。そこには太陽信仰に根ざした島の人々の、日々の生活が感じられる。

その西表には二つの魅力がある。一つは猫キチの私にとって、殊更気になるのが御存知西表山猫の存在。そしてもう一つは毎年旧の八月から九月にかけて、つちのと亥の日から三日間行われる節祭りである。「節」と書いてヂュエと発音する。私の名前でもあり、中国訓みの感じがするこの節祭りに、今年は是非参加したいと思っていたが、丁度この時期文化庁主催の芸術祭オープニングのイベントに雲南少数民族、ジノ族の踊りを披露することになり、その強烈な興奮の渦が覚めず、西表島的那根武氏からお招きを頂いたにもかかわらず、残念ながら伺うことが出来なかった。

この節祭りは世乞い ユークイ ーといって作物の豊作を願い、年の節目（本土の正月）を祝う祭りなのだが、特に稲作文化圏とはいえないこの地にあって、どのような祭りが行われるのか、非常に興味をそそられるところである。私が今追い求めているライス・ロードの文化軌跡に、はたして関わりがあるのか否か、こうした問題も含めて、来年こそ是非が非でも「節祭り」に参加し、この目、この肌で感じとってきたい。そしてこのまつりの中に生きている島の人々の、生活とその精神に触れることができたいと思っている。

もう一つ、極度に警戒心が強く、人前に姿を現さない西表山猫クンに逢うことができればこれ以上いうことはないのだが。

色々お骨折り頂いた那根氏の御好意に、お詫びと感謝の気持ちを込めて、来年の西表行きを楽しみにしている。

編集後記

舞踊文化 E.T.C. は年三回の発行を予定

※ 皆様からの投稿も歓迎（薄謝提供）

平成 2 年 1 月 1 日 定価 1,000 円

東京都港区赤坂 3-10-3

（財）黛民族舞踊文化財団

電話 03-583-3633・3606

FAX 03-583-3670



節まつり